

金相寺 寺報

遇

～ ぐ う ～

Encounter magazine "Guu"



親鸞聖人ご流罪の地・居多ヶ浜（篠画伯作）

9月

September 2014

No. 7

か み こ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もお、人々の心に響き、生きる勇氣と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思います。



● **法然上人のもとへ**

六角堂参籠後すぐに、親鸞聖人は法然上人を訪ねられました。法然上人とは、親鸞聖人の直接のお師匠様にあたられる方で、浄土宗の開祖です。「智慧第一の法然房」と褒め称えられながらも比叡山と決別し、東山のほとり、吉水の草庵で、一切衆生が救われる仏の道をただひたむきに説き広めている念仏者でした。

法然上人の説く念仏は、ひたすら念仏一つに専心することから、専修念仏ねんぶつといえます。「弥陀の本願（南無阿弥陀仏）は、もとより凡夫を救うためにおこされたものであるから、信じて、み名を称えるばかりである。自力の救いを捨て、ただ念仏に身をゆだねれば、阿弥陀如来は、善人・悪人の区別なくお救いになるのだ」と教えられました。

しかし、聖人は、以前からその専修念仏の教えをご存じだったものの、すぐには阿弥陀如来のご本願を信じ

ることができませんでした。そこで、毎日のように吉水の庵に通われ、法然上人に、熱心に教えを請われました。

そして、法然上人との出遇いから百日目、ついに親鸞聖人はこの念仏の教えを大きな感動をもって受け止められ、法然上人の門下に入り、名を「綽空」とあらためられました。

このときのことを親鸞聖人は主著であります『教行信証』に「愚禿釈ぐとくしゃくの鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて、本願に帰す」と記されています。親鸞聖人が阿弥陀如来の本願によって救われた信心決定の瞬間でした。



吉水草寮ご旧跡・安養寺



【妄念】

日本人の平均寿命が伸びていることが最も大きな要因であろうが、何処の病院も病人であふれている。

人間社会が時代とともに複雑化してきたことによつて、今や身体的疾病だけではなく、精神的な心の病が激増しているように思われる。身体的病も精神的病も、殆ど治療できる時代とはいへ、今尚難治の病の一つとして癌がある。癌は発症した体内から養分を吸収して、異常増殖し、組織を破壊して、遂には依所である筈の身体を死に至らしめるということであれば、当然癌細胞も死滅することになる。

つい先日、愚生が知人宅を訪問した折、知人宅の前で五十半ばと思われる男性に声を掛けられた。「お前は

坊主か。坊主丸儲けといつて、坊主などは碌な者でない」と、一方的に愚生を怒鳴りつけて立ち去つて行つたのであるが、その様子を尋ねた知人が見ていて、後で愚生に云うには、「彼は年中此の地域で問題を起こしていて、此の地域の和やかな環境が何時か彼によつて破壊されてしまうのではと、みな危惧しているのですよ。全く此の地域の癌のような存在ですよ」と云うのであった。幾ら注意しても聞き入れず、愈々暴れ廻る厄介者を癌に譬えて表現しているのである。

或る自然科学者が云うには、「地球も一つの生命体であり、その地球に今や途轍もない癌細胞が増殖している。その名を人間という。この人間という癌細胞は知性を持っているが故に、地球に寄生している身でありながら、自分の都合のよい様に、より便利な様に、矢鱈と乱開発を続け、限られた資源を好き放題に採掘し、その為、地球の生命力を細らせ、弱

体化させている。ここに来て地球自体が危機を感じて、人間に対して免疫力を以つて対抗しだした。それが近年の気象を初めとする、諸々の異常現象だ」と云うのである。

長い人類の歴史で特に顕著なのは、此の百年、人間にとつてより便利な、より都合のよい環境を築かんとして、地球を疵付け、今や修復不可能なまでに破壊された状態に地球があるのではないかと危惧されるところである。地球に寄生している生物のうち、人間はほんの一部でしかない。その人間が勝手気儘に、我物顔で地球を闊歩することが許されよう筈もない。仏教の根底に流れる教えは「諸法は衆縁より生起す」、生きとし生けるものは、衆の縁より生ずるとする。此の縁起の思想を通して「いのち」は、みな平等の「いのち」である。仏法に於て人間の「いのち」は重く、魚の「いのち」は軽いなどということとは全くない。すべて平等の大事な「いのち」である。

ところが人間だけが独り善がりの
便利で都合のよい、より快適な世界
を妄想し、追い求めてきた。その結
果、自分達の生存をも危ぶまれる環
境を招いたのである。是等はみな人
間の尽きることなき欲望、「貪欲」の
為せる業である。仏教では百人、或
は八万四千の煩惱などと表現される
が、その煩惱の根本は「貪欲」とさ
れる、尽きることなき貪る欲望であ
る。

川柳に「世の中は、一つ叶えばま
た二つ、三つ四つ五つ、むずかしの
世や」と詠われている。煩惱は具足
しているとされる。具足とは欠目な
く備わっているということである。
我々は危機に直面した時、「この危機
さえ乗り越えられれば、それ以上何
も望まない」と思ったりもするが、
しかし今直面している切実な問題が
解決したとしても、貪欲の煩惱が具
足している限り、欲の心は鎮まるど
ころか、いよいよ烈しく身心を煩い、
悩ましめるばかりである。

江戸期につくられた戯れ歌か。「仕
合わせは、何時も弥生花の頃、お前
十八わしや二十歳、死なぬ子三人親
孝行、使って減らぬ金百両、死んで
も命があるように」。この戯れ歌を聞
くと、あまりに虫のよい勝手な、有
り得ぬ欲を並べているので、馬鹿々
しくて笑ってしまうが、しかし現代
社会は、この戯れ歌の様な世界を真
面目顔で追い求めているのではない
か。少なくともこの戯れ歌の一部は
既に成し遂げているとも云える。

愚生の子どもの頃と比較して現在
は、科学技術、工業技術の力によつ
て、どれ程便利で快適な環境になり、
経済的にも驚くほど豊かな社会を迎
えている。しかしながら、ここでは
つきりと気付かされるのは、如何に
周の環境が便利で快適な、また豊な
ものになるうと、それによつて人間
の幸せは齎もたらされないと云うことで
ある。知性ある人間が、より幸せに
なる為に築き上げてきた社会環境が、
決して人間が幸せに成る道ではない

ということとは、どういうことなのか。
それは凡てが人間の妄念が成せる業
故である。横川法語には「妄念はも
とより凡夫の地体なり。妄念のほか
に別に心は無きなり」と説かれてあ
る。妄念とは、真実のない偽りの迷
い心、その妄念より生み出されてあ
るものに、真実のあるう筈もないの
である。さすれば我等凡夫は如何に
生きればよいのだろうか。吾人が心
に懷く「こうなれば幸せ」「こうなれ
ば不仕合せ」といった思いは、全て
妄念より起こる迷妄に過ぎぬと抛つ
て、我が心を頼りとしないうで生き
外に道はない。それは自然、「自然じねん然しか
らしめる」の道に生きることである。
このまま妄念が懷いた、より便利
な、より都合のよい社会環境を追い
求めていくとするなら、まさに癌細
胞の如く、地球の破壊とともに人類
の滅亡へと向かうのではないかと危
惧されてならない。これは杞憂であ
ろうか。

成田 宣信（金相寺住職）

御同朋の声

【金相寺青年会に参加して】

山崎 富美雄 氏

私と副住職との出会いは、私が以前、葬儀の仕事に携わっていたこともあり、共通の知人との食事の席で同席させていただいたことがきっかけでした。

年齢が近いこともあり、すぐに打ち解け、副住職から「お寺で青年会を毎月開催しているので、宜しければ来ませんか」とお誘いを受け、伺うこととなりました。初めは何をするのだろうかという漠然とした不安もありましたが、副住職の気遣いもあり、今は気兼ねなく参加させていただいています。

話題は私たちの世代がもっと興味を持たなければならぬ政治、経済、

法律などの話です。同世代の方々が中心ですので、分からないことも素直に言える気軽な会になっています。何度か参加させていただいた頃、

私はふと懐かしい想いに駆られました。私の地元は福島の会津若松という田舎町で、小学生の頃にはよく近所のお寺で子ども会（お泊り会）に参加していたものでした。そこでは三歳から十五歳位までの小・中学生が十〜二十人程集まって、親も来ずにお堂で一晩一緒に過ごすというものでした。泣く子をあやすのも子ども、指示をするのも子ども、結構大変だったという記憶があります。

しかし、今思えば小学生から中学生くらいの子とも達が、親なしで生活を共にする。その中で互いに助けあつて生活をしなければならぬ。そんなひと夏の経験が「人は一人では生きられないのだ」と、初めて教えられた出来事だったのではないかと思います。

現在の社会では、年端もいかない子ども達が、親を殺し、友人を殺し、

自分自身すら平気で殺せるような時代です。それは我々の世代ですら想像だにできません。恐らく文明や科学が想像もつかないスピードで発達し、「脳」で受け止めることに精一杯で、「心」が追いついていないのでしょうか。

私たちが青年会で論じていることも、これらの社会をより良くするために必要なことではないかと感じています。実はお寺だからこそ、このような話ができていられるかもしれません。私たちがお寺で語り合うように、未来を担う子ども達にも、お寺が語り合える場となり、「心」の拠り所となつて欲しいと願うばかりです。



※皆さんの「声」を募集しています。
今感じていることなど、お気軽にご寄稿ください。詳しくは副住職までお問い合わせください。

正信偈勉強会

学習報告

【原文】

遊煩惱林現神通 入生死園示応化

【読み方】

煩惱の林に遊びて神通を現じ、
生死の園に入りて応化を示す、と
いえり。

【意識】

煩惱の盛んな世界にしながら、自由
に不思議なはたらきを現し、
迷いの世界に入って人々を教化する
のだ、と教えられた。

ここには、浄土に往生した人のあり方が示されています。浄土に往生した人は、浄土にとどまるだけでなく、あたかも密林のように煩惱がはびこる世界に自由に出入りし、迷いに満ちた園林にあえて入り込んで、そこで苦悩する人々に応じたはたらきかけをすることになるというのです。他の人びとを導くことを含めて、それが実は往生した人にとっての往生ということであると教えられているのです。

与えられている「信心」を私たちは素直に受け取るのです。そのことによって、私たちの生活は阿弥陀仏の願う通り浄化されます。しかし、浄化されるということは、他の誰にも阿弥陀仏の願いが向けられている事実を、ともに喜べるように、人びとにはたらきかけをすることを同時に含んでいるのだと、天親菩薩は教えておられるというわけです。

（『正信偈の教え・中』本文より）

ゝ 所感 〵

私たちが「救い」ということを考えるとき、それはあらゆる悩み、苦しみ、迷いの世界を離れることだと考えるのではないでしょうか。このご時世、他人の心配などしている暇も余裕もないというのが私たちの現実ではないかと思えます。

しかし、阿弥陀如来の浄土に往生したものは、せつかく迷いの世界を離れたというのに、再びその世界に戻って苦悩する人びとに、阿弥陀如来のすべてのものを救い遂げようとする本願の御心に従いなさい。共に歩んでいきましょうとはたらきかけることになると言われています。

阿弥陀如来の本願によって救われるということは、阿弥陀如来の御心をいただくということなのでしょう。ですから、浄土に往生したものは、その阿弥陀如来の本願の御心を自らも生きるものとなるということなのだ
と教えられました。

釋宣明

青年会だより

金相寺青年会“無意味の会”では、月に一度20代から40代の青・壮年層が集い、日々追い求める意味の世界から一步離れ、日頃感じていることや、関心を持っていることなど、自らの、そして目の前の友人の言葉に耳を傾け合いながら、それぞれの存在を確かめるべく、語り合っています。

憲法問題について考える(2)

去る七月一日、臨時閣議で、他国への攻撃に自衛隊が反撃する集団的自衛権の行使を認めるために、憲法解釈を変える閣議決定がなされました。歴代内閣は長年、憲法九条の解釈で集団的自衛権の行使を禁じてきました。安倍首相はその積み重ねを崩し、憲法の柱である平和主義を根本から覆す解釈改憲を行いました。

なぜ今、集団的自衛権行使を容認する必要があったのでしょうか。日本を取り巻く様々な環境や現代における憲法ということを考えたとき、憲法改正の声が挙がるのは当然のことなのかもしれません。しかし、現在出されている自民党の草案を見ても、自民党が掲げる憲法改正が国民のためになるものとはとても思えません。むしろその逆で、国家権力を縛るものであるはずの憲法に、国民の権利を縛る条項が多く付け加えられていきます。これは、時の権力者たちにとって都合のよいものに変えよ

うとしているようにしか思えません。そしてそのような状況の中で、最も大きな問題は、私たちの「無関心」ということではないかと最近感じています。これはどこかの、誰かの問題ではありません。現代を生きる「今」、「ここ」の私たち一人ひとりの問題なのです。今こそ自ら主体性を持って向き合い、それぞれが議論しあい、意識を高めるときではないでしょうか。

青年会の中で、参加者の皆さんとの議論を通し、「すべての者は暴力におびえ、すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ」という釈尊の言葉が強く心に響きます。憲法九条の問題を通して、様々な立場や言い分があります。しかし、この言葉の意味をしつかりと根底に持ちながら、様々な議論をしていくことが大事なのではないかと強く感じています。今後参加者の皆さんと深めていきたいと思えます。皆さんのご参加お待ちしております。

副住職の



日々の出会い



●夏の子ども会「報告」

当寺、夏の恒例行事「金ピカキッズ・夏の子ども会」を七月二十八日（月）開催いたしました。

今年も朝から猛暑の中、とても多くのお友だちが参加してくれました！

まずはみんなでお勤めです。沢山のお友だちが前に出て、大きな声と一緒に勤めをしてくれました。



～お勤めのように～
みんなの大きな声に
ナリナリもびっくり！！

お勤めのあとは、『8月6日のこと』と『へいわってすてきだね』という二冊の絵本を手掛りに、昨年に引き

続き「戦争」ということについて、みんなで考えました。



～おはなしのように～
みんなで戦争について考えました

今の子どもたちや私たち親の世代はもちろんですが、今ではその祖母の世代ですら、戦争を知るものはほとんどいません。戦後六十九年の歳月が流れ、実際に戦争を体験し、その悲惨さを伝えてくださる方々は少なくなってきたしまいました。そしてそれと同時に、戦争の辛く悲しい記憶も忘れ去られようとしているように感じられます。

そのような中、今こそ子ども達と

共に学んでいきたいという思いから、私なりに感じていることや、伝えたいことをお話しさせてもらったのですが、正直、子ども達には少し難しいかなという不安もありました。しかし、こちらの思いを超えて、子ども達が様々なことを感じ、話しをしてくれたことにとても感動し、また頼もしさを覚えました。

おはなしのあとは、境内でシャボン玉や風船などを使って、みんな遊びました。



～境内でのようす～
元気いっぱいの子も達♪

おもいつきり遊んだあとは、お弁当の時間です。本堂で仲良く、楽し

くいただきました。



～昼食のようす～
みんなで食べると一層おいしいね

昼食後はお楽しみの、おやつの間。今年もかき氷をみんなで作って食べました。



～かき氷のようす～
お兄ちゃんたちが
手伝ってくれました♪

閉会後も沢山のお友だちが残って遊んでいってくれました。ご参加いただいた皆さん、楽しい時間をありがとうございました。

次回の子ども会は十二月頃に青年会と合同で親鸞聖人御命日の集い・報恩講を開催予定です。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加ください。

【今回読んだ絵本のご紹介】



『へいわってすてきだね』
詩：安里 有生
画：長谷川 義史
出版社：プロンズ新社



『8月6日のこと』
作：中川 ひろたか
絵：長谷川 義史
出版社：河出書房新社

今後の予定

法要

九月二十三日 秋彼岸会
十一月九日 報恩講

勉強会など

十月十一日 午後二時

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※偶数月（二、四、六、八、十、十二月）
の第一土曜日に開催予定。

十二月（詳細未定）

子ども会・青年会報恩講

※詳細はホームページをご覧ください

毎月一回 仏教青年会

※毎月の開催日等、詳細はホームページを
ご確認ください
ご確認いただくか電話・メールにてお問
合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。
詳細は随時ホームページをご確認いた
だくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

最近、子ども会に参加してくれているお子さんが、朝五時半から勤まる晨朝勤行にお参りにやってくるようになりました。古くから地域とお寺とのつながりが深い田舎ならまだしも、無宗教時代といわれるこの時代に、まして近所付き合いすら薄れているこの首都圏近郊において、子どもが毎朝お寺にお参りに来るということに、少し驚きました。お参りに来るその子に、なぜお参りに来るのかと尋ねると、読経を聞いていると、何だか気持ちスツとすると言うのです。

このとき私は、「寺」や「お経」というものは、単に「場所」や「言葉」というのではなく、遥か昔から人々によって大切に伝えられてきたその思いが込められた「場所」や「教え」なのだという事を思い知らされました。だからこそ人びとの胸に響くのだと。今この私にまで届けられたこの場と教えの意味と改めて大切に向き合っていかなければならないと感じています。皆さんも是非、朝のお勤めにお参りに来てみませんか。ご参拝、心よりお待ちしております。

『遇くぐうく』第七号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

TEL 252-0328

〒252-0328 神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL&FAX 042-778-2879

e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>

発行日 二〇一四（仏暦二五五七年）年九月一日